

農業教育は「国家ノ為」

東京農学校の経営に腐心

榎本武揚の要請で、想太郎が東京農学校校長に就任したのは明治26年（1893）のことだった。

ここで、東京農大設立の経緯を簡単に振り返っておく。

静岡藩の沼津兵学校が新政府の要請で閉鎖されたあと、旧幕臣子弟の教育支援を目的に、徳川育英会が組織された。その会長に榎本武揚、幹事長に伊庭想太郎が就いたことは、すでに述べた。

明治24年（1891）、同育英会によって、東京・飯田橋に開設されたのが私立育英黌だった。農業、商業、普通の3科のうち農業科だけが存続して、東京農学校、東京高等農学校と名称を替え、それが東京農大の母体となる。

さて、大塚で新発足した東京農学校の初代校長に就任した想太郎は、農業教育の意義について後に述べている。

「私ハ実業ハ最モ希望スル所デ、他ノ学問ハ随分進ンデ参リマシタガ、就中農業ハ遅レ方ガ甚シイノデアリマスカラ、私ハ国家ノ為ト存ジマシタ…」＝星亨刺殺事件の予審調書

東京農学校の経営は苦しかった。榎本は公務多忙だったから、校地校舎や学制の整備、教員人事など、すべては想太郎の双肩にかかった。東京農大の歴史を顧みるとき、始祖榎本と初代学長横井時敬とをつなぐ重い役割を担ったことを忘れてはならない。

経営の苦境に加えて、教育内容について生徒たちの不満も噴出した。

教師陣はほとんどが札幌農学校出身者で占められ、クラーク博士の教えによる畑作中心の大農論に偏っていた。稲作を主体とする小農教育が欠けていて、現実の役に立たない。それが生徒たちの叫びだった。

気鋭の農学者横井時敬を招く

事態打開を図るべく明治28年、農学校の評議員として迎えられたのが、横井だった。当時、帝国大学農科大学教授。駒場農学校出身の新進気鋭の農学者である。

想太郎とは接点のない横井に、なぜ白羽の矢が立てられたのか。

その経緯については、農商務大臣を経験した榎本が、同省の課長を務めたことのある横井の業績、人柄を伝え聞いて、想太郎に紹介したという筋書きを、農大出身の作家竹村篤が『小説東京農大』に書いているが、真相はよくわからない。

想太郎の努力にもかかわらず、結局、経営は行き詰った。「校長伊庭氏は実に惨憺たる苦心をもって一時の急を凌いだが…」とは、後の横井の述懐である。明治30年、大日本農学会に経営を移管、横井が教頭（校長は置かない）に就く。

想太郎は4年間の校長生活を終え、新たに商議員に委嘱された。

四谷の家塾「文友館」での塾生指導は続いている。この間、小笠原家の後押しで製紙会社社長、日本貯蓄銀行頭取などを務め、経営に手腕を発揮した。さらに四谷区議員、同区学務委員長にも選ばれている。

社会の名士として、世間の十分な敬意を受けていただろう。穏やかな日々のはずだった。

しかし。明治34年（1901）6月21日。想太郎50歳。何が起きたのか。



明治26年、東京農学校の第1回卒業記念写真（前列中央が榎本武揚、向かって右の和服姿が想太郎）